Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | わたしにしかみえない〈あなた〉とともに生きるということ : 〈非在の他者〉とのかかわりをめぐって |
| Author(s) | 吉田, 裕香 |
| Citation | 臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 266-282 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/100178 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【臨床哲学の書きもの】

# わたしにしかみえない〈あなた〉とともに生きるということ
## ―〈非在の他者〉とのかかわりをめぐって－

吉田　裕香

凡例

一、文献表は「参考文献」に掲載したが、以下の著作については略記号を用い、その略記号と該当頁のみを記す。ブーバーの著作については、(ID: 7＝10)というように、(略記号: 原著の頁数＝邦訳［1979年版］の該当頁）の形式で示した。

ID：

Buber, M. [1923] (1995), *Ich und Du,* Stuttgart : Reclam.

＝マルティン・ブーバー (1967)「我と汝」『ブーバー著作集1 対話的原理Ⅰ』(田口義弘訳) みすず書房.

＝マルティン・ブーバー (1979)「我と汝」『我と汝・対話』(植田重雄訳）岩波書店.

ZW：

Buber, M. [1930] (1992), *Zwiesprache, Das Dialogische Prinzip,* Verlag Lambert Schneider.

＝マルティン・ブーバー (1967)「対話」『ブーバー著作集1 対話的原理Ⅰ』(田口義弘訳) みすず書房.

＝マルティン・ブーバー (1979)「対話」『我と汝・対話』(植田重雄訳）岩波書店.

二、以下の邦文著作は、該当頁のみを記載する。

久保香奈子 (2013)『ここにいないと言わないで―イマジナリーフレンドと生きるための存在証明』, 文芸社.

はじめに

あるひとにだけみえる存在、ときいてあなたにはどのようなものが思い浮かぶだろうか。児童小説においてさびしさをかかえる主人公の前にあらわれるふしぎな友だちだろうか。あるいはファンタジー作品に登場する子どもにだけみえる精霊や妖精だろうか。このような存在は「イマジナリーコンパニオン」と呼称され、おもに子どもに生じる現象として論じられてきた。しかし、青年期・成人期以降にあらわれる／以降も存続する想像的な存在については、研究の数自体が少ないうえ、一般に認知されているともいいがたい。また、そのような存在と暮らす当人たちの語りをきくことも非常に稀である。

本研究は、そのような青年期・成人期以降の想像的な存在に焦点を当て、みずからが生み出した想像的な存在と生きるということを、従来の研究とは別様の視点で描き出そうとするものである。

第１節では、イマジナリーコンパニオンについての心理学・精神医学分野の先行研究を概観する。第２節では、精神活動によって意図的に生み出される「タルパ」と呼ばれる存在をめぐる実践についての研究を参照し、〈非在の他者〉という概念をあらたに提唱する。第３節では、イマジナリーフレンドのルーク・ユグノーと暮らす久保香奈子が語る経験を参照しながら「存在」という観点が行き詰まりをみせることを明らかにし、第４節でブーバーの思想を手がかりとして久保の語りを紐解いていく。第5節では〈非在の他者〉について語るという実践がいかなる意味をもつかについて検討する。

想像的な他者と生きる当人が口をひらく場が限られているという状況において、一部の先行研究はかれらについて語るための場をひらくという点で重要な役割を果たしている。しかしながら、先行研究では想像的な他者をめぐる経験の一側面しか言及されておらず、それはそのような存在とともに生きようとする人びとのことばとは大きく隔たるものであるということもまた事実である。かれらに対する認識と、かれらが語ることばはいかに乖離しているのか。かれらはいかに〈非在の他者〉とかかわり、いかにその乖離に立ち向かおうとしているのか。本稿は「わたしにしかみえない」存在とともに生きる人びとの語りを読むことを通じて、そうした問いを検討する。その旅を終えて〈非在の他者〉についての問いへ立ち返るとき、わたしたちの前にはいまとはまったく別の景色がひろがっているだろう。

## 1　イマジナリーコンパニオンはどう論じられてきたか

みずから想像しただれかの存在を感じその存在と交流する現象、またその存在は、心理学・医学等の学問領域では imaginary companion や imaginary playmate、日本語では「想像上の遊び友達」「空想の友達」などと呼ばれ、より日常的には「イマジナリーフレンド（imaginary friend）」とも呼ばれる。そうした呼称が指す意味内容は研究者によってさまざまだが、ここではさしあたり石谷真一（2005）の説明を参照したい。

> 想像の仲間 imaginary companion、あるいは想像の遊び友達 imaginary playmate と呼ばれる現象がある。これは幼児にかなり広く見られるもので、人形などの実体のあるものが何もないにもかかわらず、子どもがそこに本当に相手がいるように振舞うことである。子どもはその相手とおしゃべりしたり、一緒に遊んだりするのである。〔…〕このように想像の仲間は極めてリアルであるが、子どもはそれを実際の対象と混同することはない。（石谷 2005: 105）

本研究ではこうした存在すべてを包括する用語として「イマジナリーコンパニオン（IC）」を用いる（なお、各々の研究への言及では使用している用語をそのまま用いる）。石谷も述べているように、ICについての研究（以下IC研究とする）では、ICをめぐる現象は幼児期の子どもに多くみられるとされる。以下では幼児期と青年期以降に大別して、ICについての心理学・精神医学分野の先行研究の内容を概観する。

### 1.1. 子ども（おもに幼児期）のIC

子どもがもつICの最初期の研究としてはHurlockら（1932）による高校生・大学生を対象とした回想を主とする質問紙による調査、Svendsen, M.（1934）による母親への面談を手段とする調査が著名である。

麻生武（1989）は先行研究を概観するなかで、Hurlok らと Svendsen以降の研究の焦点はいかなる子どもが「想像上の遊び友達」をもつかという点に当てられてきたと述べる。この試みは頓挫しつづけ、知能・創造性といったものについて、「想像上の遊び友達」をもつ子どもともたない子どものあいだで有意な差がみられないことが示された（同前: 7)。それでもなお欧米における研究においては依然として「想像上の遊び友達」をもつのはいかなる子どもであるかという問いが循環し続けていた（同前: 6-7)。この傾向は現代にも形を変えて受け継がれているといえるだろう。

以上のように発達心理学における研究の焦点はICをもつ子どもの特性にあった。それに加えて、発達心理学では初期から社会適応における補償やトレーニングという点でICの肯定的側面が強調されてきた（富田 2002: 21)。また、ICをもつ子どもが突出した社会的認知能力をもつことを示す研究もみられる（Giménez-Dasí, Pons,&Bender, 2014; 森口 2014)。発達心理学の分野では、ICをもつ子どもの特性が探究されるとともに、ICは子どもの発達に寄与しうる現象、あるいは子どもがもつ秀でた社会的認知能力の結果とみなされたのである。

一方、精神分析学分野では臨床場面で出会う子どもの事例をもとにして研究が進められたため、ICは病理と関係づけられた。そこでは、空想の友達にかかわる現象にみられる「解離」の側面が、認知過程の防衛的な機能の一部として強調された（富田 2002: 21)。さらに、富田によれば精神分析学者たちは長年にわたり空想の友達の出現をのちの精神病理的危機の兆候であるとみなしてきた。しかしながら、幼年期に空想の友達をもつことと青年期の多重人格障害〔現在の診断名は解離性同一症〕のあいだに明確な相関関係は報告されていない（同前: 21)。

先述の石谷の「子どもはそれを実際の対象と混同することはない」（石谷 2005: 105）という説明も、病理概念とICを切り離す動きのひとつとしてとらえられる。しかしながら、病理とIC概念はそう簡単に切りわけることのできるものではない。そのわりきれなさは、次節で概観する児童期・青年期以降のICにかんする研究において顕現することとなる。

### 1.2. 児童期・青年期以降のIC

多くの研究者がi. c. は幼児期から前青年期に出現する現象であると述べている（犬塚ほか 1990: 1430)。高石が「想像上の仲間の体験過程は、出会いに始まり、別れで収束すると特徴づけられるかもしれない」（高石 2020: 133）と述べるように、ICはふつう成長のなかで「本人」の人格に統合され消滅してゆくものとされる。

しかし、児童期・青年期以降もICをもちつづける人びとはおり、そうした人びとについての言及も少ないながらなされてきた。石谷は、深層心理学から想像の仲間の存在を分析するなかで、児童期以降の想像の仲間は幼児期とは異なり、「誰にも明かさな

い秘密（個人的世界）の共有者、理解者」の役割をもち、「親密な他者の代わり」となると述べる（石谷 2005: 108-9）。

このように親密な友人の代替として機能する伴侶的なICについては肯定的側面が語られる一方、精神医学などの領域では当人にとって迫害的な存在についても同じ ICの概念のなかにふくめて言及されることがある。たとえば澤（2012）は、思春期以降にあらわれるICが本人の主体的自律性を脅かし、交代人格として存在する場合があることを指摘している。青年期においても、本人が支えを必要としている状況であらわれ、その後自然と消失するICは、正常範囲内のICの経験であるとされる（澤ほか 2002; 澤 2012）。しかし、本人の自律性をICが阻害するという状態は「通常のICから逸脱」している（澤 2012: 472）。

澤らによれば、本人が「客観的な実在と混同」することがない、また患者が I.C. から利益を享受しているという点で、I.C. それ自体は病的な現象とはいえない（澤ほか 2002）。裏を返せば、「本人」が病的状態になく、ICが外的世界の生活の手助けという役割を果たし「本人」に利益をあたえている場合にかぎって、あるひとがICとかかわることは肯定される。

これらの研究は、まだ研究が盛んにおこなわれているとはいいがたい児童期・青年期以降のICにかんする思考的枠組みを提供するものであり、重要な示唆に富む。しかし、こうした研究が見落としてきたこと、問題として着目してこなかったことがある。この点については、2節以降で具体的に検討する。

## 2　イマジナリーコンパニオンと〈非在の他者〉

### 2.1. タルパについて

あるひとがあるひとだけにしかみえない他者とかかわることは、病理とからみあいながら、心理学・精神医学において理論化されてきた。しかしながら、現実に存在しない他者とかかわるという現象はもっと多様なものをふくんでいるはずである。人類学などの領野でおこなわれてきた、霊的存在とのかかわりにかんする研究はその一端だろう。本節では、人類学を中心とした分野で展開される、タルパという存在についての研究を、Veissièreの論を中心に概観する。

タルパは古代チベット仏教に出自をもち、僧侶たちが恐怖をネズミやクモのかたちで顕現させるという実践において作成される存在を指すことばであった（Veissière 2016: 56）。現代におけるタルパの実践は、2012年に子ども向け作品『マイリトルポニー』専用のインターネット掲示板をきっかけに編みだされた（ibid.: 58）。『マイリトルポニー』の成人男性ファンたちが、瞑想と明晰夢の技術を組み合わせて、知覚できる imaginary companion をよびおこす方法を考えたのである。この試みはすぐにほかのWebサイトやインターネット上のディスカッションフォーラムを通じてひろまった（ibid.: 58-59）。タルパにかかわる実践は「タルパマンシー」とよばれ、タルパマンシーをおこなう人びとはみずからのことを「タルパマンサー」と称している（ibid.: 55）。タルパマンサーはインターネット上のハウツーガイドや公開討論を媒介として修行をおこないタルパを手に入れる（ibid.: 56）。タルパマンサーはタルパを作成するため、

自らを語る際に複数の自己を意識して語る。その後、訓練がうまくいけば自動的に作動してタルパが形成されるという（ibid.: 62）。

Veissièreによればタルパの大きな特徴は、タルパマンサーたちが意図的にその存在を作り出すことと、タルパマンサーたちがタルパを聴覚・触覚・視覚等の知覚によって経験していることにある。

Veissière はタルパをICのひとつの形態としているが、Martin et al. はタルパの性格特性とホストの性格特性の関連を調べる過程でタルパと imaginary friend の差異について言及している（Martin et al. 2020: 14）。かれらによれば、ホストたちが内在性よりも外在性においてみずからのタルパを理解していること、つまりホスト自身の独語や想像の産物ではなく、外部の視点を持つ現実の個人としてタルパを認識していることが、imaginary friendとタルパの大きな差異である（ibid.: 14-15）。

このようにタルパとICは差異をもつとするなら、タルパにかんする研究（以下「タルパ研究」とする）とIC研究もまた差異をもつはずである。次節では、タルパ研究の視座から、IC研究がとりこぼしてきたものについて検討する。

### 2.2. IC研究がとりこぼすもの

前節で言及したMartin et al. によるタルパの外在性や他者性にかんする指摘は、IC研究とタルパ研究の視座の差異を端的にいいあらわしているだろう。IC研究はあるひとの「想像」としてICを個人のなかに位置づけてきた。一方タルパ研究はタルパの「外在性」に着目する。ここでは「想像」ということばをそのような存在に用いることは当人たちにとって適切であるのかという疑問が生じうる。心的イメージ、たとえば立方体を心のなかに思い描いて回転させるというような「想像」をめぐる一般的な理解においては「外在性」はとらえられず、また立方体のような心的イメージとタルパやICは明らかに異なることとして経験されているからだ。

この「想像」と「外在性」についての検討は本研究の主題ではないためこれ以上深く立ち入ることはしないが、本研究はタルパ研究と、タルパがみずからとは異なる他者として認識されていることを出発点とする、タルパ自身の語りに着目するといった視座を共有する。

一方で、タルパの「作成」をタルパマンサーたちのコミュニティを前提とするという点で、IC研究によって検討されてきたような経験をひろく包含するものとはいいがたい。そのため、本研究はタルパ研究といくつかの視点を共有しつつも、完全に依拠することはしない。

タルパとのかかわりはICをめぐる経験とは差異をもつ。しかしながら同時に、ICとタルパをはじめとする霊的存在はその特徴の多くを共有しており、たとえばタルパ研究はICとのかかわりとして従来名指されてきた経験を検討することにおいて重要な示唆を与える。だとすれば、そうした研究が相互に参照しあう方途をさぐることが必要である。そのためには双方を包含する概念の創出が不可欠であるだろう。次節ではICとして名指されてきた現象にタルパ研究の視座を織りこんで検討するためのあらたな概念について検討する。

### 2.3. 非在の他者

小野は、「ホモ・パティエンス」という人間理解に立った人間学を構想するなかで、「〈非在〉のエティカ」を探究する（小野 2022）。小野は以下のように〈非在〉を定義づけている。

> 〈非在〉とは、「在る／無い」の単純な二項対立図式に収まらない〈残りのもの〉を思考するための概念であり、承認のシステムのうちに単純にはあらわれることのないまま、しかし「在る」のではないが「無い」わけではないという仕方で、つねにすでにそこに潜勢しているものを指す。（同前: i）

〈非在〉に対する問題意識を小野に生じさせたのは、水俣病における認定問題だった（同前: 196）。水俣病認定においては、国や県が関与する委員会の認定から漏れた人びとは存在しないことにされてしまった。そうして承認のポリティクスから取りこぼされた、「存在しているにもかかわらず無いものとされた「潜在」する人びとの「存在」」（同前: 196）はどのような名前で呼べばよいのか。この問いへの応答として〈非在〉概念は生み出されたのである。

もちろん想像と呼ばれうる精神作用をとおして出会われた他者を水俣病認定問題と同じ位相の〈非在〉において語ることはできない。しかしながら、ICに類する存在についての語りは〈非在〉概念とひびきあう。たとえば作家の村田沙耶香は、著作のインタビューにおいて、子どものころ「彼らのことは大人に言ったら踏みにじられると思って隠して」いたとふりかえっている[注1]。その秘匿は否定的な視線を想定してのことではあるが、村田は「「イマジナリー」って言葉自体が本当は辛い」ものであり、仮に彼らのことを話して「空想的で素敵ですね」と言われたとしても、自分の心は壊れてしまうだろうと言う。「存在する／しない」「想像」「空想」といった観点は、ほかの人びとにはみえない大切なひととかかわる村田のような人びとに苦しみをもたらしうるのである。

そうした苦しみを考えるとき、ある／ないに回収されえないものたちについて考えようとする〈非在〉という概念は大きな力を与えるだろう。そこで、本研究においてはICやタルパとして名指されてきた存在たちを〈非在の他者〉としてとらえることとする。

## 3 〈非在の他者〉とのかかわりをめぐって

### 3.1.「存在証明」の行き詰まり

本節からは、先行研究の概観から針路を変えて、実際に〈非在の他者〉と暮らすひとの語りをみてみたい。〈非在の他者〉と生きる人びとの手記は非常に数少ないが、本研究ではそのうちのひとつである、イマジナリーフレンド（作中の表記はIF）のルーク＝ユグノーとともに暮らす久保香奈子の手記『ここにいないと言わないで―イマジナリーフレンドと生きるための存在証明』を読む。

久保は、手記の「はじめに」で、「たったひとりの男のために、ひいては彼の生きている世界のために、存在証明書を書く」(15) と宣言し、ルークが「存在している」ことをしめそうとする。しかしながら同時に、久保はほかのひとに知覚できないことを理由にルークを「空想」であるともいう。

このことは、ルークの「存在証明」にいかに影響するのか。麻生は「想像の遊び友達」の実在性を信じていない多くの人びとと、その姿や声を見聞きする人びとのあいだには、「想像の遊び友達」の実在性が未承認であるという問題(コミュニケーション・ギャップ）と、知覚を共有することは不可能であるという問題（パーセプション・ギャップ）が横たわっていると指摘する（麻生 1989：29)。

久保の「ルークの存在証明」は、〈非在の他者〉についての人々のあいだのコミュニケーション・ギャップを埋めようとする実践としてとらえられる。しかしながら、パーセプション・ギャップはどうしても埋めることができない。まさにそのことが、実在性をめぐるコミュニケーション・ギャップを埋めるという試みを行き詰まらせてしまう。人びとが「実在」について承認することには、間主観的に知覚されているかどうかという問題がからみついているからである。パーセプション・ギャップを埋められない以上、久保以外のひとがルークの「存在」を了解することは難しく、〈非在の他者〉の「存在証明」は堂々巡りに陥る可能性をもつ。

ルークの「存在証明」としての読みがある面で膠着状態に陥るならば、わたしたちはルークの「存在証明」とは別のしかたで久保の語りを読む可能性を探らなければならないだろう。

### 3.2.〈非在の他者〉とのかかわりのみられかた

本書の発売に際してWebメディアへ寄せたコメントにおいて、久保はIFの説明のあとに以下のように書き添えている。

> ―みなさんのびっくりされている顔が目に浮かびますね。目に見えない空想が今ここで生きてるだなんて、なんて夢見がちな！著者はまさかちいさな子どもでもあるまい、これは小説だろうか？なんて、思ってらっしゃるでしょ？ふふふ、無理もありません。空想が生きてそこにいる、と信じるのは、ふつう明日からエイリアンが地球にどっさり引っ越してくるのを信じるくらい大変です。[注2]

久保がここでユーモアを交えつつ書くように、想像／空想するということは子どもの「空想遊び」、つまり娯楽に結びつけられる傾向にある。また、久保もIFをもつことは「病気ではない」(25) と訴えているように、ルークのような存在は容易に病理と結びつけられる。久保の「存在証明」はこうした状況への異議申し立てとしてあるだろう。「〈非在の他者〉が存在するか否か」という問いから距離をとりつつ、〈非在の他者〉を否定する声への抵抗として久保の語りを読む手がかりはどこにあるのだろうか。これまで参照してきたIC研究やタルパ研究は久保の語りのいくつかの面をとらえている。IC研究とタルパ研究のなかには、久保の語りをとらえるための糸口があるはずだ。

## 4　あなたとともに生きるということ―ブーバーの思想と〈非在の他者〉

### 4.1.〈非在の他者〉の「相互性」？―〈汝〉との出会い

澤らによれば、I.C. と患者が「直接，対話的な交流を交わす」ことは、I.C.の大きな特徴であり、この「相手からの語り返し」、すなわち「I.C. と患者の関係が「相互的」であること」が人形やペットを擬人化し一方的に語りかけることと I.C. をめぐる経験の大きな差異である（同前: 218)。

〈非在の他者〉からの語り返しは、〈非在の他者〉との相互作用の議論における必要不可欠な要素である。よって〈非在の他者〉をめぐって語られる相互性については、「相互」的であるということよりむしろ、「〈非在の他者〉から語りかけられること」に重きをおいて読むほうが適切であるだろう。ここでは、IC研究では名指されてこなかった、ICとかかわりをもつ人びとの存在が浮かびあがってくる。本研究では〈非在の他者〉とかかわる人びとを、〈非在の他者〉に相対するひと、またのちに扱う「応答」と「対話」をおこなうひとという意味もこめて「応対者」とよぶことにしたい。〈非在の他者〉から語りかけられてはじめて、あるひとはその語りかけにこたえる「応対者」になるのである。

ここから〈非在の他者〉からの語りかけについて考えるにあたって、ユダヤ人哲学者・マルティン・ブーバーの『我と汝』『対話』を経由したい。

ブーバーによれば、ひとは世界に対してふたつの異なった態度をとる。その態度のもとにあるものが「我－汝」「我－それ」という一対の根源語である。〈我－それ〉の〈我〉は〈それ〉を利用し経験する一方で、〈我－汝〉の〈我〉は関係のなかに生きる（ID: 8-10＝9-11)。わたしがひとりの人格として向かいあうときにはじめて〈汝〉との関係は実現される。

〈汝〉との関係の世界は自然と交わる生活、ひとと交わる生活、霊的存在と交わる生活の三つの領域から成り立っている（ID: 10-11＝11-12)。ブーバーにおいては、「我－汝」としての関係性を結ぶ他者は、聖なるもの、絶対者といった存在である可能性をふくむのである。

わたしはいかに〈汝〉との関係に入るのか。ブーバーによれば「わたしが〈汝〉と直接の関係に入っていく」ことは、同時に「〈汝〉がわたしと出会いをとげる」ことでもある (ID: 15＝19)。〈汝〉との出会いは求めることによって見出されるものではなく、恩寵によって果たされる（ID: 15＝19)。

このようにして出会われた〈汝〉との関係は残念ながら持続するものではない。われわれの世界のなかでは〈汝〉は〈それ〉となることを運命づけられている（ID: 21＝26)。「我－それ」の秩序づけられた世界に生きるわたしたちは、その世界から完全に離れることはできず、そのような世界のなかでは、「我－汝」の「出会い」は非常に不安定である（岡本 1959：101)。よって、〈汝〉は〈それ〉となるさだめにあるのである。

次節では、こうしたブーバーの論を手がかりとして、久保とルークの出会いをみて

いこう。

### 4.2.〈非在の他者〉からの語りかけと出会い

手記のなかで、ルークとの出会いは非常に印象的に描かれている。その場面の一部を引用してみたい。

> その日はへんに胸騒ぎがした。 虫の知らせ、というのでもない。 ただなんとなくこそばゆいような、落ち着かない感じだったのを覚えている。
> (さて、こんな感じっていままでにもあったかしら…....)
> 考えるともなしに経験をたぐりよせつつ寝転がっていると、唐突に原因がむこうからやってきた。先述のとおり、無音のまま忍び寄ってきたのだ。
> 〔…〕くるりと視線を部屋中にめぐらしてみて、ベッドの足元を見やったときみつけた。
> 細身の男が、こちらに背をむけて座っていた。〔…〕一拍の間をとって、静寂を破らぬようにそっと声をかける。
> 「あなたはだれ？」
> ごくごく小声に抑えたのに相手は逃さず聞き取ったらしく、気だるそうな感じでゆっくりとふりむいた。
> 「知らない」〔…〕
> 男が、一言こぼした。低い、掠れたような声である。ことばの端が不思議と甘く響いて、私は、急に心臓のあたりがびくりと疼くのを感じた。(8-10)

このやりとりのあと、久保は恐怖で動けなくなってしまった。その緊張状態は、男がにじりよってくる動きによってほどかれるが、そのあと久保とかれのあいだには再び長い沈黙が続く。「再び沈黙による人形になってしまわぬよう、私は彼を観察することで恐怖をやりすごそうとした」(12)。ほどなくして、男は久保を嘲るように笑い、「愛してなんかやらないぜ」と吐き捨てた。このあとに、久保の口をついて出たのは「嘘でもいい！嘘でもいいから、愛してるって言って、ねえ、ルーク！」(14) という叫びだった。

この出会いの場面をブーバーの論に照らしつつ検討してみよう。着目したいのはルークと久保のあいだに横たわる「沈黙」である。ブーバーは、〈汝〉との関係における「沈黙」の重要性を示唆する。〈汝〉への応答はすべて〈汝〉を〈それ〉の世界へ閉じこめてしまう。ブーバーはいう。「ただ〈汝〉への沈黙、すべての言葉の沈黙、まだ形をとらず、分離せず、言葉の沈黙における待ち受けのみが〈汝〉を自由にする」(ID: 41＝51)。

ここで、「彼を観察することで恐怖をやりすごそうとした」久保の沈黙は、このような応答の前の沈黙とは異なる性質のものであったことが見出される。ブーバーは、目の前のひとを知覚する際に機能するのは、「観察」「観照」「語りかけられる」という三つのはたらきであるという (ZW: 150-153＝185-188)。語りかけられるというはたらきは、目の前のひとを知覚しようとする意図をもつ観察や観照のはたらきとはまった

く異質であり、そこにはただ、わたしに応答をもとめるひとつのことばが生じているのみである。ブーバーはこの種類の知覚を〈会得〉とよび、のちにふれる〈対話〉に〈会得〉が不可欠なものであることを示唆している。

ここから読めば、久保の「沈黙」は「観察」をおこなうことによって埋めつくされていたことがわかる。見知らぬ男へ向かって沈黙することは久保にとって「恐怖」であり、その恐怖は久保を男の観察へと走らせた。その観察のさなかに発せられた「愛してなんかやらないぜ」ということばに「語りかけられ」た久保は、今度はことばがかたちをなす前の沈黙へと一瞬のうち陥ったのではないか。そこから浮かびあがった久保の応答が、「愛してるって言って、ねえ、ルーク！」(14) という叫びだった。

吉田敦彦は、この「沈黙」という位相に着目し、出会いは沈黙を通して対話へ到達すると考察する（吉田 2007)。この観点に立てば、さきほど見てきた場面も〈対話〉の萌芽として読むことができるだろう。次節からは、久保とルークの対話がいかなるものなのか検討したい。

### 4.3.〈非在の他者〉との対話

前節のルークのことばには、ルーク以前に久保のもとにあらわれたIFたちの存在がかかわっている。自分を好きになってくれるひとがほしいという久保の願いからルーク以前にあらわれたIFは、ある日突然消えた。久保はそのたびにIFの作成を繰り返し、いままでのIFたちのことを忘れたふりをして「あなただけよ、愛してるわ」(49) とささやきつづけた。「愛してなんかやらないぜ」というルークのことばは、この「自己満足のために平然と行ってきたIFの記憶改造という秘密」(48) を飲みこんだあとに放たれたものだった。ルークが吐き捨てたことばは、久保への語りかけであると同時に、久保の「秘密」に対する応答であったのではないだろうか。

ここでは語りかけと応答が円環状にくりかえされている。ブーバーにおいては「「我－汝」関係における呼びかけと応答が「対話」」（松丸 1993：49）であることを考えれば、このやりとりは〈対話〉としてとらえられるだろう。

久保は現に、出会いにつづく場面で、「対話」という表現をもちいている。みずからが存在する理由を探し出そうとするルークを見つめるあいだ、「私たちは真正面から向き合った。絶えず対話して、互いに満足のいく答えを導いた自信があった」と久保はいう（48)。

ここで、ブーバーの〈対話〉概念についてあらためて確認しておこう。ブーバーは対話とよびうるものを、真の対話、必要に迫られて発生する実務的な対話、対話に偽装されている独白の三種類に分類している（ZW: 166＝204)。「真の対話」は、実際にことばが交わされたかどうかにかかわらず、対話に関与するひとがその現存在と存在相において、現実に相手を心に想い、相手と向かい合い、対話者と相手の間に生き生きとした相互関係をつくりあげようとする場合に成立するものであるが、真の対話はまれにしか起こらない（ZW: 166＝204)。

前述のルークの存在理由を探す道中の対話は具体的には描かれていない。久保とルークの対話とはどのようなものなのだろうか。またそれは、ブーバーの〈対話〉概念か

らいかに読むことができるのか。次節ではルークの消滅をめぐるエピソードを読みながらその問いを検討する。

### 4.4.〈非在の他者〉の消滅

大学受験の重圧から逃れるため、1週間ほど空想に溺れる日々を過ごした久保は、ルークがいままで消えてしまったIFと同様に、愛の言葉を繰り返す存在になりかけていることに気づく。「ルークとずっと一緒にいたければ、社会に出て生きるよりほかはない」(57)――そのことに気づいた久保は、社会復帰に進もうとする。

しかし、ルークはこの決定に猛反発した。久保が社会に出るということは、すなわちかれと過ごす時間が減るということでもある。高校生活にもどろうとする久保と、その必要はないと考えるルークは、社会復帰をめぐって激しい口論になった。

> 「消えてもいいって言うの？あなたがいちばん嫌がることじゃない」
> 「消えない！俺は最後になるんだ、何があっても。だからこのままで大丈夫だ」
> 「そうはいかないわ。 いい？私がこのまま引きこもっていたら、私たちの会話材料になる刺激が減る――〔…〕早い話が、私はあなたを忘れるわよ！忘れられるような薄っぺらいものにはならないって決めたんじゃなかったの？」
> 「う、ああわかったよ！」
> 　ルークはそれまで憮然としていた表情をさっと歪めて、吐き捨てるように怒鳴った。「外に出て刺激受けて、ふたりでいろんなこと話して対応する、そのほうが消えないためにいいんだな？」(58)

こうして、かれらはふたりでともに生きるために「お互いに過度な空想には依存しすぎず、現実とのバランスを取って生きること」(59) を約束した。

〈非在の他者〉とのかかわりのために必要な刺激として、応対者と現実の他者とのかかわりがあることを示唆するこの語りは、IC研究の見方とは逆行する。しかしながらこれは結果として久保の社会復帰という望みをかなえるものであり、その点で従来のIC研究が設定する枠組みに回収されてしまいかねない。しかし、〈非在の他者〉との〈対話〉という面に着目するならば、わたしたちはそのようなものとして回収されえない部分にこそ目を向けなくてはならないのではないだろうか。

ルークの消滅の危機は、同じような愛のささやきの繰り返しからはじまっていた。ブーバーは愛のささやきを独白へ分類し、それを「顔をもたぬ対話の虚像」と呼ぶ (ZW: 167＝205-206)。そのかかわりは〈それ〉、経験と利用の対象としての事物とのかかわりとなっているというべきだろう。〈それ〉は持続ではなく、「静止しているもの、停止しているもの、中断し、硬直し、関係の欠如、現存の欠如」なのである (ID: 17＝21)。

しかし久保は目の前のIFたちの消滅の危機に気づくことはなかった。ルークによって過去のIFたちについての記憶に向きあった久保は、はじめてIFたちの消滅がいつも同じような経路をたどっていたことに思い至ったのである。その消滅は久保のIFたち

とのかかわりのありかたに起因していた。そこから抜け出すための手だてが「ルークのために」生きることであり、さらにルークとの関係が硬直したものになってしまわないために導き出した方策が「社会生活に戻る」ことであったのではないか。それがたとえ愛のことばを引き出すのではなくルークの反発を引き起こすのだとしても、ルークとことばをかわす道を久保は選んだ。

次節では、〈非在の他者〉との対話についてもうひとつのエピソードを参照し、そこから〈非在の他者〉としてあらわれる〈あなた〉といかに向きあうかという問いについて考えたい。

### 4.5.「都合のいい人形だと認識されるのはいい気分じゃない」―危機としての出会い

ルークが久保以外の人びととかかわりをもつ方策を探るなかで、ふたりはインターネット上でIFについて話すことのできる友人たちと交流をもつようになった。ある日、その友人に対するメールに、ルークが「都合のいい人形だと認識されて、それをいいことに甘ったれられるのはとてもじゃないがいい気分じゃない」と書きこんでいるのを発見し、久保は衝撃を受ける。久保は「私のなかに確実にある保持者としての優越感―自分が求めて出会ったものだから、好きにコントロールできるのだという直感―を見抜かれたようではなはだ耳が痛かった」(66) という。ここで、ルークは久保にとって異質な他者としてあらわれ、拒絶をつきつけている。

ブーバーの思想における「出会い」を、吉田は危機への曝露として描いている。これまでの枠組みでは理解しえない「他者の他者性（異質性）を引き受けるとき、完結していた自分たちの物語に亀裂が入り、その外部に曝される」(吉田 2007: 56)。他者との出会いは、安定したわたしの世界をゆるがす一方で、生き生きとした輝きをわたしの硬直してしまった生によびもどすものでもある（同前: 58-59)。ここでは、ルークの抗議に対する久保の「痛み」こそが真の対話の契機となるだろう。その痛みをもって久保はもういちどルークにむけて〈汝〉と語りかけることができるのである。

他者に対して「コントロールできるという直感」をもつことは、わたしたちの日常生活において決してめずらしいことではない。久保がルークの拒絶を語ることによって、わたしたちのなかにある他者をコントロールしてしまえるというひそかな予感は暴きたてられる。

それは、わたしたちが他者へ向かう際の態度を問うものであると同時に、〈非在の他者〉との向きあいかたへの問いを提起するものともなるだろう。〈非在の他者〉は応対者にとって人格としてあらわれているのであり、他の人びとが応対者をつうじて〈非在の他者〉とかかわる際にもその人格性はあらわれる。だとすれば、〈非在の他者〉に対してコントロールということばがつかわれることは、人格に対していかに向きあうべきかという点において、問題として扱われうる。

次節では、応対者である〈わたし〉が〈あなた〉という〈非在の他者〉について他の人びとに語るということについて、応答という観点から考えていきたい。

## 5　あなたについて語るということ

### 5.1. あなたについて語るということ

前節において、読者であるわたしたちは久保の語りを読むことでルークという人格と向きあってきた。想像を通して他者に出会うということ、それは人格たるものと出会うという点で、知覚を通して生身の身体をもつ他者と出会ったり、そのひとの記憶を想起したりすることと等しくとらえられる。その位相からみれば、三者は人格との「出会い」のしかた、あるいは「出会い」の場が異なるのみである。そこでは、〈非在の他者〉との関係をこえて、わたしたちがいかに他者と向きあうべきかという問いが提起されていた。こうして読めば、久保の語りは〈非在の他者〉とのかかわりを「娯楽」「病理」とし、〈非在の他者〉をなきものにしようとする視線への抗議、そしてひろく他者に対峙する際の態度を問いなおすことをうながす語りかけとしてとらえられる。

こうした読みは、ルークとのかかわりを久保が人びとに開示するという試みをもってはじめて成立するものである。二者関係において閉じられるはずのルークと久保の対話が、なぜ人びとに開かれなければならなかったのか。

ここで、前節で紹介した、吉田の「出会い」についてのブーバーの読みを思い出そう。異質な他者と出会い、安定した物語の外に連れ出されること。吉田によれば、これこそが「出会い」の本質なのであった。

このことを〈非在の他者〉をめぐる視線と重ね合わせると、〈わたし〉の語りとそれをきく人びとのあいだに、果たして「出会い」は生じていたのだろうかと疑問が生じる。〈あなた〉とのかかわりを〈わたし〉の個別で特殊なものとしてみる人びとは、生身の身体をもつ人びととのかかわりのみによって秩序づけられた世界の外部にさらされることはない。しかしながら、久保の語りはかれらの世界の境界線をゆるがす。かれらは衝撃による沈黙のあとに「〈非在の他者〉について語る人びとを自分はなぜ隔たりの外へ追いやったのか」と問うかもしれない。そこからことばが紡ぎだされるとき、〈わたしたち〉とかれらの〈対話〉ははじまるだろう。久保の訴えは、〈わたしたち〉と出会おうとしない人びとと〈対話〉をはじめるための第一歩としてなされたのではないか。

しかし、〈あなた〉について語るという試みをもし対話への第一歩、あるいは抗議としてのみとらえるなら、それは語る〈わたし〉と語りの宛先となる人びとの二者間の問題となる。〈あなた〉について話すという試みのなかにいかに〈あなた〉は見出されるのだろうか。

吉田はブーバーの論をもとに、「あるひとについて話すこと」と「あるひとに向かって語りかけること」を区別する（吉田 2007: 127）。後者がそのときその場所で語られるべくして語られた、一度限りのことばをおくるのに対して、前者はあるひとについて解釈したことを話すだけの、「独白の伝達」であると吉田はいう（同前: 127）。

もちろんブーバーの〈対話〉において想定されているのが〈汝〉のことばに〈我〉が相対してこたえるその瞬間であることは明らかである。しかし「あるひとについて話すこと」はそう簡単にわりきれるものなのだろうか。「〈あなた〉について語ること」が、「〈あなた〉に向かって語りかけること」を内包する可能性はないだろうか。

久保の手記はルーク「について」書かれたものである。よって、吉田の論にしたがえば、

久保の手記においてルークは〈それ〉となっている。しかしながら、わたしたちは前節において久保の語りのなかに〈汝〉としてのルークを見出したのではなかっただろうか。久保の語りにおいては「『〈あなた〉に向かって語りかけること』について語ること」とも呼ぶことのできる二重構造が成立しており、そこにはルークが〈汝〉であった形跡がたしかに残されているのである。

また、「たったひとりの男のために、ひいては彼の生きている世界のために、存在証明書を書く」(15) と久保が宣言したように、この語るという行為は〈あなた〉、ひいては〈非在の他者〉の世界のためになされている。この点において、〈わたしたち〉の〈対話〉を語ることは〈あなた〉と〈非在の他者〉全体への応答としてとらえられるだろう。

しかしながら、〈わたし〉が〈あなた〉について語るということは、そう容易におこなうことのできることではない。次節では、その困難を回避しつつ〈あなた〉について語るための手だてについて検討したい。

### 5.2. 文学の手段としての可能性

村田は先述のインタビューのきっかけとなった著書『信仰』(文藝春秋、2022年) において、村田にとって現実のいかなるひとよりもはっきりと存在している「イマジナリー宇宙人」のことをだれにもきちんと話したことがない、と述べている (同前: 94)。

> イマジナリー宇宙人のことを、明確には誰にも話したことがない。現実逃避だと言われ、笑われ、もしも「治され」てしまい、イマジナリー宇宙人たちを失ってしまったら、私は死ぬのだった。心を回復する唯一の場所を壊されたら、人間は死ぬ。だから誰にも言わなかった。 生き延びるために。(同前: 94-95)

このように切迫した状況のもとにある人たちが直截に〈わたしたち〉のことを語るのは非常に困難な試みであるだろう。しかしそれでも〈わたしたち〉について語りたいと〈わたし〉が願うとき、〈わたしたち〉の関係を守りつつ〈あなた〉について語るための手だてはどこにあるのだろうか。

ブーバーは、芸術といういとなみの源泉について、次のように述べている。

> 芸術の永遠の源泉は、形象 (Gestalt) がひとと向かいあい、そのひとをとおして作品となることである。それはそのひとの魂の所産ではなく、形象と出会い、形象から働きかける力に迫られて生じる出来事である。(ID: 13＝17)

〈汝〉と向かいあうとき、そのかかわりのなかであらわれる形象のはたらきかけが芸術の源泉となるのだとすれば、〈あなた〉との出会いとかかわりは〈わたし〉を通じて作品となる可能性をもつ。

ブーバーにあって出会いにとっては「あらゆる手段は障害である」(ID: 16＝19)。しかし、吉田が「人々は、その〔精神的な創造活動の産物の〕〈それ〉化された〈汝〉

〔…〕との深められた関わりを実現することによって、新たに〈汝〉的世界と出会うことができる」（吉田 2007: 100）と述べるように、創造された作品は〈汝〉との出会いの契機ともなる。〈わたしたち〉の関係を作品に残すことは、〈わたしたち〉のなまの関係をつつみかくしつつ〈あなた〉へ応答するための、手段としての可能性を秘めている。そこでは〈対話〉を言語によってあらわすことのできる、文学が重要な意味をもつかもしれない。久保や村田の手記はそのような作品として読むことができるのであり、わたしたちは久保の手記の読解を通じてルークという〈汝〉と出会ったのである。

〈わたしたち〉は、文学のなかに生きながらえながら、それを読む人びととのあいだで起こる「出会い」を待ちのぞむ。そこに、〈あなた〉への応答のありかたのひとつとしての文学[注3]という光はある。

## おわりに

本研究では、「イマジナリーコンパニオン」等と名指されてきた他者的存在とのかかわりを、従来のIC研究とは異なる視点で描き出そうとするものであった。

本稿において積み残してしまった問題は数多くある。しかしそれらは、それぞれの〈わたしたち〉を離れてあるものではなく、本稿で明らかにした〈わたし〉と〈あなた〉のかかわりのしかたは、それらの問いを検討するための基盤となる。

〈わたし〉にしかみえない〈あなた〉とともに生きるということ、それは〈あなた〉へ、〈あなた〉と出会えたことへ〈わたし〉が応答しつづけることであり、〈わたし〉の命が尽きるときまで、その応答は続くかもしれない。それは決して平坦な道ではないが、その険しい道を進んでゆくこともまた、〈あなた〉への応答であるだろう。本稿が〈わたしたち〉が生きる道を照らす、一筋の光となることを願う。

## 注

[1] 竹花帯子. “「勧誘されている人に“騙されないで”と説得するのは傲慢かなって…」作家・村田沙耶香が『信仰』で描いた“自分の世界を生きたい人”の愛しさ　村田沙耶香さんインタビュー #1”. 文春オンライン. 2022-06-08. (https://bunshun.jp/articles/-/54892?page=5), 2023-01-04参照.

[2] ショセキカ. “ここにいないと言わないで―イマジナリーフレンドと生きるための存在証明―”. 書評空間. 2013-10-01. (https://booklog.kinokuniya.co.jp/booklog/handaishosekika/archives/2013/10/post.html), 2024-01-04参照.

[3] ここで、文学作品はフィクションなのではないか、と思われたかたもいらっしゃるだろう。しかしながら、大山が「文学とは、生々しい人間と、人間の状況を具象化して描いたものだ」(大山 2008: 238)という一般的な理解に反駁しながら、文学は「「あるもの・こと」を〔わたしひとりの思考において〕「ある時点で」考えることである」(同前: 236）と定義づけるように、文学とフィクション・虚構は直接むすびつくものではない。大山の定義に基づけば、久保や村田のエッセイは「文学作品」として読めるのである。その一方で、久保がルークのことを虚構としてみる目線に抵抗していることは明らかであり、「文学」についての一般的理解からすれば、久保や村田の作

品を「文学」として読むことには問題が生じるだろう。これらの点については、今後の課題としたい。

参考文献

麻生武（1989）「想像の遊び友達: その多様性と現実性」,『相愛女子短期大学研究論集』, 36，3-32.

Buber, M. [1923] (1995), *Ich und Du,* Stuttgart: Reclam［IDと略記］

＝マルティン・ブーバー（1967）「我と汝」『ブーバー著作集1 対話的原理Ⅰ』（田口義弘訳）みすず書房.

＝マルティン・ブーバー（1979）「我と汝」『我と汝・対話』（植田重雄訳）岩波書店.

Buber, M. [1930] (1992), *Zwiesprache, Das Dialogische Prinzip,* Verlag Lambert Schneider.［ZWと略記］

＝マルティン・ブーバー（1967）「対話」『ブーバー著作集1 対話的原理Ⅰ』（田口義弘訳）みすず書房.

＝マルティン・ブーバー（1979）「対話」『我と汝・対話』（植田重雄訳）岩波書店.

Giménez-Dasí, M., Pons, F., & Bender, P. K. (2014). Imaginary companions, theory of mind and emotion understanding in young children. *European Early Childhood Education Research Journal,* 1-12.

Hurlock, E. B.,& Burstein, M. (1932). The imaginary playmate: a questionnaire study. *Journal of Genetic Psychology*, 41, 380-392.

犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉（1990）「想像上の仲間一文献の展望」,『精神科治療学』, 5（11），1435-1444.

石谷真一（2005）「想像の仲間についての深層心理学的考察」,『神戸女学院大学論集』, 52(2)，103-123.

久保香奈子（2013）『ここにいないと言わないで──イマジナリーフレンドと生きるための存在証明』，文芸社.［該当頁のみ表記］

Martin, A., Thompson, B.,& Lancaster, S.（2020）. Personality characteristics of tulpamancers and their tulpas.
http.//doi.org/10.31234/osf.io/5t3xk, 2024-10-31 参照

松丸啓子（1993）「M・ブーバーの〈対話〉とK・ヤスパースの〈実存的コミュニケーション〉との比較研究」,『教育哲学研究』，67，46-58.

森口佑介（2014）「空想の友達―子どもの特徴と生成メカニズム―」,『心理学評論』, 57(4)，529-539.

村田沙耶香（2022）『信仰』，文藝春秋.

岡本道雄（1959）「「出会い」と教育: 第一部: マルチン・ブーバーの「我と汝」の思想を中心として」,『京都大学教育学部紀要』，5，97-112.

小野文生（2022）『〈非在〉のエティカ―ただ生きることの歓待の哲学』, 東京大学出版会.

大山一郎（2008）「文学とは何か」,『高岡法科大学紀要』, 19, 262-232.

澤たか子・大饗広之・阿比留烈・古橋忠晃（2002）「青年期にみられるImaginary

Companionについて」,『精神神経学雑誌』, 104(3), 210-220.
澤たか子 (2012)「「正常」から「異常」へ越境するImaginary Companion」,『精神科治療学」, 27(4), 467-473.
Svendsen, M.（1934）. Children's Imaginary Companions. *Archives of Neurology and Psychiatry,* 32, 985-999.
ショセキカ. “ここにいないと言わないで―イマジナリーフレンドと生きるための存在証明―”. 書評空間. 2013-10-01.（https://booklog.kinokuniya.co.jp/booklog/handaishosekika/archives/2013/10/post.html), 2024-01-04参照.
竹花帯子. “「 勧誘されている人に“騙されないで”と説得するのは傲慢かなって…」作家・村田沙耶香が『信仰』で描いた“自分の世界を生きたい人”の愛しさ　村田沙耶香さんインタビュー #1”. 文春オンライン. 2022-06-08. (https://bunshun.jp/articles/-/54892?page=5), 2023-01-04参照.
高石恭子（2020）『自我体験とは何か：私が〈私〉に出会うということ』, 創元社.
富田昌平（2002）「子どもの空想の友達に関する文献展望」,『山口芸術短期大学研究紀要』, 34, 19-36.
Veissière, S. (2016). Varieties of Tulpa experiences: The hypnotic nature of human sociality, personhood, and interphenomenality. *Hypnosis and Meditation: Towards an Integrative Science of Conscious Planes,* 55-78.
吉田敦彦（2007）『ブーバー対話論とホリスティック教育―他者・呼びかけ・応答―』, 勁草書房.

（よしだ・ゆうか）